

や頭の動きを止め、音に気持ちを向けその響きを聴いています。体全体でその音に集中しているようです。響きが小さくなり消えるまで集中しています。響きが消えて音がなくなると目をゆっくりと動かしながら次の音を待っている、探しているかのような表情が見られます。音がなくなると少し力が抜け、柔らかな表情になりました。そして、目をゆっくりと動かしながら次の音を待っていました。次の音への期待が高まり、意欲的な気持ちになっていくようでした。少し間をあげ、もう一度トーンチャイムを鳴らします。響きが聴こえると、目の動きを止め、微笑みました。2回目の音の響きも手と頭の動きは止めたまま、音の響きが消えるまで集中して聴いていました。近くで響くきれいな音に、心をぐっと傾け、消えるまで気持ちを向けています。音が消えた後、周りの音のしている中ではあるけれど、気持ちの中では静けさを感じているようでした。響きがだんだんと小さく消えていく変化に気持ちが高まり、満足しているように感じました。響きと響きの間の数秒に次の音への期待が高まり、集中が続いていたようでした。



幼児の成長発達
について
富田 道子

あおばには就学前の子どもが4人います。Aさん(5歳、横地分類A2)は他児が遊んでいる姿や持っているものや気にして、背這いで移動して近づいていきます。以前までは他児が持っている玩具を取り上げてしまい、相手が嫌がったり怒ったりしても意に介さず手にした玩具で遊んでいました。その様子から、相手の行動や表出から気持ちを汲み取ることができないように思えました。しかし、Bさん(5歳、横地分類B6)が、おままごと用の玩具で野菜を

切ったりお皿に乗せたり、食べる真似をするなどをして遊んでいると、それに興味を持って見ることが増えました。食べる真似をして、職員に「おいしいね」と言葉をかけられたBさんが笑顔で頬に手を当てているのを見てAさんの表情が緩みます。Bさんに食べ物の玩具を渡し、もつとやってほしいと気持ちを訴えるようなこともあります。遊んでいるものが欲しくて持っている玩具を取ってしまうこともあります。取られたBさんが怒ったり泣いたりして嫌がると、表情が曇りその様子を伺っています。そのような場面で、職員が介入し「ちようだい」「どうぞ」と言葉を渡かけると、お互いに玩具を渡



したりもったりしています。このような経験を通して、相手が渡してくるのを待つことができるようになり、手を差し出す動作を見て渡そうとするようになりました。

他の2人も、大人が近くにいない状況で、他の子どもが遊んでいる様子を興味深く見つめている場面は多く見かけます。また、そこから今まで遊ばなかった玩具にも興味を持ち遊ぶようになってきました。

子ども同士が意識しあい、やり取りする場面があることで、相手に共感したり、時には自分の気持ちが伝わらず悔しい思いをしたりと、さまざまな気持ちや、めばえていくのだと思います。このように、他児のやっていることに興味を持ち子ども同士で影響を与え合うような環境を意図的に設定する必要があると考え「知育園めばえ」を開設することとなりました。

「めばえ」はあおばの幼児だけではなく、うららの幼児2名も参加しています。一室に集合すると、始まりの会があり全員の名前が順番に呼ばれていきます。他児が呼ばれているのをジッと見ている児や、自分の名前が呼ばれると笑顔になる児もいます。今後



も集団での知育活動を通じて、参加している子ども達の発達を促せるように働きかけていきたいと思えます。詳しい活動内容や子ども達の様子は次号でお知らせします。

